

25 アスパラガス

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術</p> <p>土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	<p>2 t /10a (定植時 30 t /10a)</p>
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料施用技術</p> <p>被覆肥料等の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術</p> <p>有機質肥料（油かす等）を用いた施肥体系とする。</p>	<p>化学合成窒素量</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハウス、露地 <p>定植1年目 19.8kg/10a 以内</p> <p>定植2年目以降 26.4kg/10a 以内</p>
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術</p> <p>除草機械により雑草（畦畔での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術</p> <p>生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物農薬：B T剤(ハモンヨウ、オオハコガ、ヨウムシ)など <p>○光利用技術</p> <p>色彩粘着板利用により害虫を捕殺する。</p> <p>黄色蛍光灯、光反射資材利用により害虫の活動抑止や忌避させる。</p> <p>○被覆栽培技術</p> <p>被覆資材により有害動植物の付着を防止する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紫外線カットフィルム（アブラムシ類、アザミヤカ類） ・防虫ネット（開口部被覆：アブラムシ類、アザミヤカ類） <p>○フェロモン剤利用技術</p> <p>フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リトルア剤(ハモンヨウ)など <p>○マルチ栽培技術</p> <p>紫外線反射マルチ、生分解性マルチ、稲わら等利用により有害動植物のまん延防止する。</p>	<p>化学合成農薬成分回数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハウス 10成分以内 ・露地 11成分以内
<p>その他の留意事項</p> <p>有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。また、土壌分析により施肥量を調節する。</p> <p>当該作物は、湿害を受け易いので、排水対策を十分に行う。</p> <p>地上部刈り取り後の株等はバーナーで焼却する。</p>		